謙譲の補助動詞「参らす」についての一考察

坂口智子

序

平安中期頃に出現し、院政期から盛んに用いられるようになった、謙譲の補助動詞「参らす」について、主に敬度という面から、その性格を考察してみた。使用対象の範囲、使用主体との落差を調べるため、登場人物を何群かに分類した。基準は、作品別に設けたが、統一しなかったのは、作品が各々性格を異にしているためである。以下にまとめて分類をあげておく。

（狭衣物語）

Ⅰ	院・帝・春宮
Ⅱ	大宮・女院・中宮
Ⅲ	宣耀殿女御・弘徽殿女御（女一宮）・藤壺女御（宰相妹）
Ⅳ	女一・二・三宮・一品宮・源氏宮・若宮・飛鳥井腹姫・一の宮
Ⅴ	堀川大臣一家・左大臣・大納言
Ⅵ	宰相中将・母・妹・中務宮少将（三位中将）
Ⅶ	飛鳥井君・修行僧（飛鳥井兄）・常磐の尼
Ⅷ	その他・女房・乳母・仏神など

（説話集）

Ⅰ	天皇・皇族・摂関・大臣
Ⅱ	大納言・中納言・大将・中将など及び僧侶
Ⅲ	Ⅱ群に続くもので大体国司以下
Ⅳ	その他仏神・通行中・旅先などでの関係、特別な利害関係・肉親・男女関係など

桜井光昭氏「今昔物語集の語法の研究」による

（曽我物語）

Ⅰ	頼朝
Ⅱ	頼朝家臣、十郎五郎とその縁者
Ⅲ	虎・少将・従者・一般男女
Ⅳ	仏神・その他

（義経記）

Ⅰ	皇族・朝廷
Ⅱ	源氏一門（公達・女君も含む）
Ⅲ	僧（身分高）
Ⅳ	家臣・郎等

Ⅴ	僧（衆徒・山伏等）・他の武士
Ⅵ	一般男女
Ⅶ	仏神

（保元物語）見野久幸氏「『保元物語』『平治物語』における待遇表現について」による

Ⅰ	法皇・上皇・天皇・女院・親王
Ⅱ	禅定殿下・関白・左大臣・右大臣・内大臣
Ⅲ	大納言・中納言・大将
Ⅳ	大弁・卿・大夫・中将・衛門督
Ⅴ	中弁・小弁・少納言・頭・少将・衛門佐・兵衛佐
Ⅵ	Ⅴの北の方・公達・姫
Ⅶ	郎等・家来・男女（普通）
Ⅷ	仏神（僧・巫女）

本　論

「狭衣物語」とその前後

ここに取りあげる作品は「参らす」が出現したと思われる頃のものである。

まず「狭衣物語」において「参らす」は、使用対象は皇族とそれに準ずる臣下がほとんど、特に地の文では、下限がⅤ群である。しかし、院や帝といった最高位の人物を待遇する例はない。また、対話文をみてみると、下位者から上位者へという謙譲の普通の関係の使用に限られている。一例、分類上は対等の関係があったが、これには心理的な差が認められるので問題としない。用例が少ないためかもしれないが、話し手がⅤ・Ⅷ群に限られているのは気にかかる。Ⅳ群以上が話し手として使用するには、対象との落差から考えて敬度が高すぎるのではないかとも考えられる。Ⅵ・Ⅶ群からの使用がないのは、同群より上の層との接触が狭衣を除いては、ほとんどないためであろう。

「聞ゆ」について調べてみると、使用対象はⅠ群からⅧ群まで全体に渡っており、話し手との関係も、話し手が上位という普通とは逆のものがでてきている。特に乳母や女房に対する使用があるのは注目される。例を一つあげておく。

この御簾の前の、今まで、うゐ〳〵しく侍けるも「答め聞え①給ふべくや」と、うらみ聞ゆ②」

話し手は狭衣、聞き手は今姫君の女房達。①は為手が女房達、受手は狭衣。謙譲の意が強ければ、これは自敬表現となるが、この時狭衣は中将なので、そうは考えられない。②は①と為手・受手が逆で話し手優位である。女房達の緊張をほぐそうとする狭衣の親しみの表現といえる。この例ほど落差が極端でなく、話し手の方に心理的に遠慮すべき要素があるにしても「参らす」の場合が同群で、それも一例しかなかったのとは、明らかに状況が異なっている。

以上のことをまとめてみる。「聞ゆ」は使用範囲が広く、敬度の高さを保ちながらも、その一方では話し手優位の例も見られ、謙譲語としては衰退しかけているのが覗える。これに対して「参らす」は、比較的高い敬度を持ってはい

るが、I群の人物を待遇する例が見られないことから、それほど高い敬度を表現しているわけではないようである。但し、「聞ゆ」二二七「参らす」二一、と用例数に極端な差があり、それが影響しているとも考えられるので、この段階で明言はできない。

「狭衣物語」以外の作品については、宮地幸一氏・宮腰賢氏の論を中心に述べていく。(注1)

「枕草子」に六例、「栄花物語」正篇に十二例、続篇に十五例。受手は帝・皇族・道長など臣下でも最高の地位にいた人物、である。なお、これ以前に「源氏物語」「落窪物語」などに例がみられるが、表記等の問題から、確実な例とはいえないらしい。

さて、宮地・宮腰両氏は「枕草子」で「参らす」の用例の条件と一致する「聞ゆ」の用例のみを取りあげて、両者を比較すると受手の階層は両語で重ならず「参らす」の方が敬度が高いと指摘されており、待遇関係から考えると、出現初期の段階においては「参らす」はむしろ「聞えさす」の表現領域に登場したものとされている。

ここで「狭衣物語」について再び振り返ってみると、他の作品に現われた傾向とは異なっているようである。用例数も比較的多いし、使用対象をみた場合にも、同じ皇族でも親王・内親王に集中し、院・帝の例はなかった。やがて「聞ゆ」にとってかわるのだから、敬度が低くなること自体は問題ではないが、成立の下る「栄花物語」と較べると、発達が少し早いようである。このことについては、宮地氏(注2)の「狭衣物語に多い『まゐらす』の一因には、時代に愛好されたこの物語は、その伝承される間に手が加えられてはいりこんだ、と思われるものが相当あるのではないか」という御意見が参考になる。

出現期における「参らす」は「聞えさす」の表現領域と重なる、言わば最高敬語的な性格で、非常に敬度が高かった、ということが言える。

説話集について

作品別の「参らす」「聞ゆ」の用例数は、表に示した通りである。

	聞ゆ	参らす
今昔物語集	25	1
古本説話集	1	29
宇治拾遺物語	3	39※

※　四段活用2例を含む

この時期には「参らす」は定着していたと思われるが、表からもわかるように「古本説話集」から用例数が急に増え

ており「今昔物語集」以降に、何か転機があったものと思われる。

まず「今昔物語集」についてだが、既に桜井光昭氏の詳しい研究があるので、それを参考に論を進める。(注3)

「参らす」は一例しかない。

己レハ誰ソ。恠シク具シ参ラセタル様ナルハ

小舎人童が、主人の命令で、女の後をつけていたところ、女の供人にみつかり咎められる場面である。女の身分はあまり高くはないようだが、話し手とは主従関係なので落差があり敬度は高い。

「聞ゆ」はすべて対話文中での使用（手紙も含む）である。使用対象の上限は、国司相当階級であり、低い。用例数が少ないためとも考えられるが、ここで話し手との関係を調べてみると、対等・話し手優位の関係が半数以上を占め、受手優位の場合でも落差はあまり大きくなく、敬度自体が低下していることがわかる。ところで、人物を詳しく眺めてみると、話し手の大多数（二十例）が女性であるという特徴的なことが現われてくる。話し手は男性だが受手は女性というのも一例あり、女性関係で多く用いられる傾向があったようである。男性同志での使用もあるが、これには一つの型があり、すべて話し手優位で、何らかの親密さを伴っての使用となっている。

『相ヒ不聞エジ』ト返〻ス思ヒツレドモ、

師の僧から、昔の弟子に、師弟関係の親密さによるものであろう。

『此ク告聞エタリ』ト異君達ニナ努〻不宣ヒソ」

少将から尾張守の子へ。相手を笑い者にしてやろうとの下心から好意を装っている。二例あげておいたが、このように良くも悪くも、親密さを伴う使用である。

「古本説話集」では「聞ゆ」は一例のみである。

國の内にある物なればえ辭びきこえで

この部分は「今昔物語集」や「宇治拾遺物語」の同語では、普通の文であり、本来謙譲表現を必要とするほどのものではなかったのではないかと思われる。

「参らす」については、用例数が急に増えてきているが、その状況は、まず使用対象の層が非常に片寄っていることが目についた。地の文ではⅠ群、Ⅳ群の仏神に限られており、特に仏神への使用は、約八割を占めている。対話文では、Ⅲ群とⅣ群男女関係に一つずつ例がみられるが、他は地の文と同様、Ⅰ群と仏神である。使用対象の層からみただけでも敬度はかなり高いと言える。話し手と受手の関係も大体落差が大きい。

「宇治拾遺物語」については「聞ゆ」は三例。すべて対話文中である。使用状況をみてみると、女性関係が二例と男性同志が一例。後者については、断言はできないが話し手優位と考えられ、好意を伴う使用となっており「今昔物語集」にみられた傾向と同様のことが言える。

「参らす」の使用状況は、地の文では使用対象はⅠ群とⅣ群仏神に集中している。この点では「古本説話集」と同じ傾向を示しているが、こちらの方は仏神の割合が少し減

っている。対話文では、対象の層が全体に広がっており、また今までの例とは傾向の少し異なるものもでてきている。

(ア)此道に、殊にすぐれておはしますよしを承て、少々習ひ参らせんとて、参りたるなり。

(イ)けふよりは、ながくたのみ参らせんずる也。

(ウ)夜部見つけ参らせざらましかば、かやうにこそは候はまし

(ア)は僧から陰陽師安倍晴明へ。ほぼ対等か、晴明が上位と考えられる。僧が晴明の器量を試してやろうと訪れた場面なので、そのためわざと謙遜した態度をとっていると思われる。(イ)は法師から仏供養のため招いた講師への使用である。依頼者・被依頼者という関係から心理的落差が考えられるが、更にこの場合法師は講師への布施をごまかそうとの下心を持って相手をおだてているのでもある。以上二つは、身分的には落差は小さいが、下心から（純粋な敬意ではなく）丁重な表現を用いている例である。(ウ)は晴明から蔵人少将への使用である。身分的関係ははっきりしないが、呪詛されて命の危うかった少将を晴明が救ったという事情からは、明らかに話し手（晴明）優位である。依頼されたのでもないのに、見知らぬ人間の命を救うということには、かなりの行為が感じられ、それによる使用と言えるのではないか。ここで見てきた三例は敬度の高さからいうと、他の例よりも低く、使用範囲の広がりを予想させるものといえよう。また、使用対象が「御出居」「経」のように物である例がみられるのは注目すべきであろう。

説話集についてまとめておくと「参らす」はⅠ群への使用が多く、敬度は総じてかなり高いといえる。作品の性格と関係するのだろうが、仏神への使用が目立ち、一つの特徴といえるだろう。

「聞ゆ」については、最も用例の多い「今昔物語集」でも二五例しかなく、しかも敬意の低下が著しく、特殊化の傾向もあり、消滅寸前という状態である。

「参らす」は敬度の面からは、まだ「聞えさす」の領域に近いような感がないではないが「聞ゆ」の状況や「宇治拾遺物語」では少数ながら使用範囲の広がりを思わせる例がみられることを考えあわせると、この時期には「聞ゆ」と入れ替わって定着し、発展し始めたということができるだろう。

伝承関係から、他作品と「参らす」の用例部分の表現を比較することができる。これによると「古本説話集」や「宇治拾遺物語」で「参らす」となっている箇所は「今昔物語集」その他の作品では、大部分が「奉る」となっている。文体の違いによるものとも勿論考えられるが、単にそれだけではなく、成立年代のずれによるとも考えられる。やがては「奉る」の領域にも進出していくことの一つの裏付けとしていいだろう。なお「申す」となっている例も二つあって、こちらへの進出も覗うことができる。

このような面からも「参らす」はこの時期急速に発達してきたことがわかる。

軍記物語について

この時期は「参らす」の発展期と思われる。

軍記物語ということで、ひとまとめに扱ったが「曽我物語」「義経記」の二作品は、個人に重点を置くという点（これは敬語の使用状況を調べていく上でも考慮すべき）で「保元物語」とは性格が異なる。

「保元物語」では、地の文では使用対象の下限がⅡ群となり、しかも二七例中二二例がⅠ群への使用で、敬度は非常に高いようである。更に人物を詳しく調べていくと、Ⅰ群では約七割が崇徳上皇で、Ⅱ群では左府頼長のみ、とかなり限られている。対話文でも、Ⅰ群への使用が全体のほぼ半数を占め、一例を除いて、すべて崇徳上皇である。Ⅴ・Ⅵ群への使用は、為義とその周辺者で片寄りがあるが、分類の段階でこの群に属する人物は限定されているので、Ⅰ・Ⅱ群の場合と同列には扱えない。使用対象の層だけからみても、敬度はかなり高いが、話し手との関係からみても、親子・皇族同士を除けば、主従関係のみなので落差は大きいといえる。

「曽我物語」については、三五例中三三例が対話文と、かなり片寄っている。使用対象の中心となるのは、主人公である兄弟だが、頼朝がそれに次いで多い。皇族・大臣クラスの例が皆無に等しいという点では、敬度は低下していることになる。しかし、作品の性格から考えると、中心が武士というあまり身分の高くない層に置かれているのだから、一概には決めつけられない。話し手との関係から見ると、主従やそれに準ずる関係の落差が大きいものもあるし、落差はほとんどなく親愛感による表現というものもあり、敬度の高さを保ちながら、使用範囲を広げてきているといえる。

「義経記」について、地の文では、使用対象はⅡ群とⅦ群（仏神）に集中している。Ⅰ群の例がないのは、作品の性格上の問題と考えられ、対話文には例があるが、これも僅かである。対話文では、大体対等以下からの使用である。少し問題のある例を説明しておく

過ぎし頃は行き逢ひ参らせて候に、道を避けられしは、何の遺恨にて候ひけるぞ

話し手・為手は鬼若（弁慶）、受手は不特定の衆徒である。鬼若はまだ児なので、年齢差のためといえなくもないが、ここは因縁をつけて乱暴しようとする所で、それで慇懃な表現をしているとも考えられる。受手は、相手が乱暴者の鬼若とあって、すっかり怯えており、話し手優位と思われる要素もある。

いよいよ涙つくしがたく候。されども今は思ひ切り参らせ候

受手は佐藤継信・忠信兄弟、話し手はその母で、分類上は受手優位で問題ないが、聞き手が義経なので、そちらへの配慮も考えられるのではないかという例である。

軍記物語についてまとめておく。「保元物語」では、Ⅰ群への使用が非常に多く、敬度はかなり高い。人物が限定されていることが一つの特徴である。「曽我物語」「義経記」については、同群での使用、親愛感に基づくものが目

立ち始め、使用範囲の広がりを示している。だが、全体的にはまだ敬度は高いといえる。但し、この敬度の高さは、主従関係によるものがほとんどで、いわば相対的なものである。このことについては、作品の性格と合せて考える必要があり、この段階で明確なことはいえない。

結論

敬度について調べてきたわけだが、大まかな傾向として、出現期には「聞えさす」の領域と重なり、最高位の人物に対して専用されるという高い敬度を持っていたが、次第にそれが低下し「聞ゆ」の領域に移っていった、ということがいえる。この敬度の低下は、使用対象の層が下位になるというより、層の広がり、親愛感による使用という範囲の広がりという形で現われるようである。

細かな部分については、取り上げた作品の性格がそれぞれ異なり、それについての研究もしていないので、分析はできなかった。性格の違いによるずれとしては、例えば成立年代の近い「宇治拾遺物語」と「保元物語」を比較すると、前者では既に使用範囲を広げ、話し手優位と思われる例まで認められるのに、後者では院に対する使用が中心で敬度が非常に高く、発達が遅れているようである。

最後に詳しい研究はしていないが、気づいたこととして二点あげておく。

表のAは地・対話文別の用例数であるが、対話文での頻度が高いようである。これは敬意の表わし方に主観的要素が含まれやすいことを示しているのではないか。Bは対話文の用例数と、為手と話し手が一致するもの（準ずるものは除く）の用例数を並べて示したものである。特に出現初期には一致する割合が高いようである。これは、為手のへりくだり、直接的な敬意表現の用法が多かったのではないかということである。

作品名	用例数		用例数	
	地	対	一致	全
狭衣物語	8	13	10	13
今昔物語集	0	1	0	1
古本説話集	16	13	10	13
宇治拾遺物語	9	28	18	28
保元物語	27	27	13	27
曽我物語	2	33	24	33
義経記	23	136	74	136
	A		B	

〈注〉

1. 補助動詞「きこゆ」から「まゐらす」への漸移相ー女流日記作品を中心にー
栄花物語における補助動詞「まゐらす」について

2.「ます源流考」
3.「今昔物語集の語法の研究」

（三十二回生）